

トマス・ブラウンの『キリスト教徒のモラル集』と *Ars Moriendi* の伝統

宮本 正秀

キリスト教徒の医師、トマス・ブラウン

トマス・ブラウン(Thomas Browne, 1605-82)は、独特の文体と驚異的な博識により 17 世紀の英国の文化と文学に確固たる足跡を残したが、本業は医師であり、その著作は文筆活動にアマチュアとして取り組んだ成果であった。しかしながら、彼の著作の中にも本業の医師としての活動とかかわりが深いものがないわけではない。刊行年度の順に挙げるならば、『医師の信仰』(*Religio Medici*, 1643)、『ある友人への手紙』(*A Letter to a Friend*, 1690)、『キリスト教徒のモラル集』(*Christian Morals*, 1712)がそれにあたる。本発表ではその中の『キリスト教徒のモラル集』を中心に、彼が患者の臨終にどのように接し、人間の死をどのようにとらえていたかについて考察する。その際に、中世から初期近代にかけてヨーロッパ各所において広く受け入れられていた *Ars Moriendi* の伝統と比較対照することで、「肉体の死」や「魂の救済」などの問題に、ブラウンが医師として、キリスト教徒として、どのように向き合ったかをたどっていきたいと思う。

Ars Moriendi の伝統

Ars Moriendi (『死ぬための技法』)は、15 世紀に成立したテキスト群で、死の床にある人間がどのように死と向き合い、人生の最後の瞬間をどのように過ごすべきか、そして、それを見守る近親者はどのようにふるまえばよいのかを具体的に示したものである。*Ars Moriendi* は、17 世紀にかけてヨーロッパ各地で、それぞれの言語に翻訳や翻案され、多くの読者を獲得した。また、文字を解さない人々のために、同じ内容を木版画で表したのも多数流通している。*Ars Moriendi* というテキスト群の存在は、中世から初期近代にかけてのヨーロッパにおいて、死後の魂の行く末がすべての社会階層の人々にとって極めて重要なテーマであったことを示している。

ブラウンが医師として活動した 17 世紀においては、患者の臨終に立ち会い、その最期を見届けることは、医師ではなく、聖職者の役割と考えられていた。患者の死が間近に迫り、これ以上の有効な治療がないと判断される場合、医師は、その後の一切を聖職者にゆだね、患者のもとから立ち去るのが一般的であった。医師(physician)は、人間の肉体的な(physical)部分を担当し、魂や霊的な部分には関与しないという職域の住み分けが成立していたのである。死にゆく魂を見送る一連の作業は聖職者が担うとされていたが、そこには病の治療に劣らないほどの重要な役割が託されていた。臨終において魂は悪魔からのさまざまな誘惑にさらされるが、それに打ち勝ち、キリスト教徒としての正しい信仰を貫いた者の魂だけが、神の祝福を得て、天国に迎えられと考えられていたのである。聖職者が臨終に立ち会うことができない場合は、近親者が代役として、死にゆく魂を悪魔から守り、天国へと送り出さなければならなかった。その際に頼りにしたのが *Ars Moriendi* であった。*Ars Moriendi* は、死にゆく人の魂を天国へと送り届けるために必要な知識や作法が記された実用書として流通したのである。

ブラウンの医師としての活動：『医師の信仰』

『医師の信仰』には、ブラウンが研修医として過ごした日々抱いたさまざまな思いが記されている。そこには、若き日のブラウンが、通常の医師の業務を越えて患者の臨終の瞬間に大きな関心を寄せていたことをうかがわせる部分がある。彼は、臨終の瞬間について、「魂は肉体の結紮を逃れて、本来の自己に回帰して理性を發揮する」(2-11)や「人間は後産のとも呼ぶべき肉体の殻を投げ捨て、最終の世界へと産み落とされる」(1-39)などと記している。彼は魂が産み落とされる「最終の世界」を「聖パウロが言葉にできない場所と述べた、霊にふさわしい所」と言い換えているが、それが天国を表していることは明らかである。研修医として研鑽を積んでいた時期から、彼の関心は患者の肉体の治療に留まらず、その魂の救済にまで及んでいたのである。医師として、キリスト教徒として、ブラウンは患者の臨終を終焉として見るだけでなく、魂の新たな旅立ちの瞬間としても見守っていたのである。

見送り人として：『ある友人への手紙』

『ある友人への手紙』は、タイトルが示すとおり書簡の形式を借りた作品であり、そこには、医師として結核に侵された若者の最期をみとった際のさまざまな思いが記されている。手紙の受取人は、ブラウンの友人であり、今は遠方にいるらしい。その友人の依頼で、ブラウンは結核に侵された若者のもとを訪れ、そしてその最期を看取ることになった。『ある友人への手紙』にはその様子が記されているが、そこには二つの異なった

スタイルが混在している。一つは、患者の病状を見極め、正確に分析し、記録するという、医師としてのスタイルである。もう一つは、死の床にある若者への愛情にあふれ、その魂の幸福な行く末を願ってやまない友人としてのスタイルである。彼は、若者の病状が重く、医師として手の施しようがなかったことを冷静に記録した。その一方で、若者が、キリスト教徒にふさわしい高貴な精神を貫き、死を見事に受け入れたのを見て、その魂が、天国に受け入れられたことを確信し、その喜びを遠方にある友人への書簡に記したのである。

***Ars Moriendi* の伝統と『キリスト教徒のモラル集』**

「ある友人への手紙」は、1650年代に書かれた実際の書簡に基づくと考えられているが、それが著者の生前に発表されることはなかった。刊行されたのは、著者の死後8年を経た1690年であったが、刊行された作品では、若者の病状とその最期の様子を記した書簡の部分に続いて、キリスト教徒としての正しい死の迎え方、さらには、正しい生き方をまとめた教訓集のような19の段落が付け加えられている。正確な執筆時期や詳しい経緯は不明であるが、おそらくブラウンの晩年のある時期に、教訓集の部分は書簡の部分から切り離され、別の独立した散文作品に書き換えられることになる。それが『キリスト教徒のモラル集』であった。

『キリスト教徒のモラル集』の内容には、当時のイングランドでも広く流通していた *Ars Moriendi* と共通する部分が多い。*Ars Moriendi* では、臨終を迎える魂に対する悪魔からの誘惑を、「信仰の欠如 (lack of faith)」、「絶望 (despair)」、「性急 (impatience)」、「慢心 (pride)」、「強欲 (avarice)」の5種類に分類し、その対処法とともに説明しているが、『キリスト教徒のモラル集』でも、これらについて繰り返し語られている。しかしながら、*Ars Moriendi* が、死にゆく人の魂を天国へと送り出すための実用書であったのに対して、『キリスト教徒のモラル集』から読み取ることができるのは、人生の日々をどのように過ごすべきかについての示唆や教訓である。著者ブラウンの視線は、正しい死に方よりも正しい生き方へと注がれているのである。

イングランドにおいて *Ars Moriendi* は、プロテスタントの信仰のもと、カトリックの諸国とは一線を画した独自の発展を遂げている。その注目すべき特徴は、死後の魂が神の祝福を得て、天国に迎え入れられるためには、臨終の瞬間をどのように迎えるかよりも、それまでの人生の日々をどのように過ごかが重要である点にある。17世紀の神学者 Jeremy Taylor の *The Rules and Exercises of Holy Living* (1650) と *The Rules and Exercises of Holy Dying* (1651) という双子の著作は、イングランドにおける *Ars Moriendi* をいう文学ジャンルの到達点であった。

『キリスト教徒のモラル集』は、トマス・ブラウンの死から30年が経過した1712年に刊行されている。その執筆は、著者の最晩年の1670年代であったと考えられる。15世紀にその内容が確立され、17世紀にかけてヨーロッパ各所に広く流通した *Ars Moriendi* は、すでにその役割を果たし終えていたかもしれない。ある結核患者の臨終に立ち会った経験から、キリスト教徒としての正しい死の迎え方を確認する『ある友人への手紙』という作品が書かれ、それがさらに、『キリスト教徒のモラル集』という、人生の日々を過ごすための「モラル集」へと姿を変えた過程は、「正しい死に方」から「正しい生き方」へとテーマを変えた、イングランドにおける *Ars Moriendi* の変容の歴史と符合する部分が多い。ブラウンは、若き医師として「死」と向き合い、後年は、キリスト教徒として「生き方」に思いをめぐらせた。その変遷の歴史がイングランドの *Ars Moriendi* と軌を一にしたのは決して偶然ではない。

参考文献

- Atkinson, David William (ed.) *The English Ars Moriendi*. (Renaissance and Baroque: Studies and Texts 5) New York: Peter Lang, 1992.
- Beaty, Nancy Lee. *The Craft of Dying: The Literary Tradition of the Ars Moriendi in England*. (Yale Studies in English, 175) New Haven & London: Yale UP, 1977.
- Browne, Sir Thomas. *21st-Century Oxford Authors: Thomas Browne*. Ed. Kevin Kileen. Oxford: Oxford UP, 2014.
- , *Religio Medici and Other Works*. Ed. L. C. Martin. Oxford: Clarendon Pr., 1964.
- , *The Works of Sir Thomas Browne*. 4 vols. Ed. Geoffrey Keynes. London: Faber & Faber, 1968.
- , *The Major Works*. Ed. C. A. Patrides. London: Penguin Bks, 1977; 2006.
- Cressy, David. *Birth, Marriage, and Death: Ritual, Religion, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart England*. 1997; 1999; Oxford: Oxford UP, 2010.
- Houlbrooke, Ralph. *Death, Religion and the Family in England 1480-1750*. Oxford: Clarendon Pr., 1998; 2000.
- Wear, Andrew. "Making Sense of Health and the Environment in Early Modern England," *Medicine in Society: Historical Essays*. Ed. Andrew Wear. Cambridge: Cambridge UP, 1992; 1996.